

1P137

成人期の小児慢性疾患患者に関わる小児科
及び小児病棟看護師の困難感とケアの工夫

仁尾 かおり¹、水野 芳子²、山崎 啓子³、
森貞 敦子⁴、栗田 直央子⁵、黒田 光恵⁶、
内海 加奈子⁷、桧垣 高史⁸、西村 あをい²、
中村 伸枝⁹

¹三重大学大学院医学系研究科 ²東京情報大学

³宇部フロンティア大学 ⁴倉敷中央病院

⁵静岡県立こども病院 ⁶自治医科大学とちぎ子ども医療センター

⁷千葉県こども病院 ⁸愛媛大学大学院医学系研究科

⁹千葉大学大学院看護学研究科

【目的】

成人期となった小児慢性疾患患者の一定数は、成人診療科への転科が困難で小児科への通院及び入院を継続している。そのような患者・家族への看護ケアを検討する第1段階として、総合病院、大学病院等の小児科及び小児専門病院の看護師の困難感と工夫を明らかにすることを目的とした。

【方法】

総合病院、大学病院の小児科又は小児病棟、及び小児専門病院に勤務し、成人期の小児慢性疾患患者の看護経験が3年以上の看護師14名を対象に、患者・家族の転科困難な理由、患者の疾患と治療の概要、看護実践で感じた困難感と工夫した看護実践について半構造化面接を実施した。インタビュー内容の逐語録を作成し、困難感と工夫に関する内容について意味内容を検討し、類似性・相違性に基づき分類しカテゴリー化を行った。研究者所属施設の倫理審査委員会の承認を得て実施した。

【結果】

対象者の看護師経験は平均18.1年（SD 5.44）、小児看護の経験は平均13.9年（SD4.33）で、9名は成人看護の経験があった。成人診療科へ転科しない（できない）理由は5つのカテゴリー「本人の準備性」「親の思い」「疾患・障害の特徴」「医師の対応」「システム不足」があり、看護師の困りごととして7つのカテゴリー「患者が自立していない」「親が子どもの自立を阻害している」「親が転科を望まない」「看護師が患者の自立を阻害している」「成人看護の基礎的能力が不足している」「成人患者が入院する環境が整えられていない」「転科のシステムが整えられていない」が得られた。そしてこのような現状に対し看護ケアの工夫として5つのカテゴリー「本人を中心に関わる」「親の移行希望を尊重する」「発達段階に応じた対応をする」「成人看護に不足しているものを補う」「転科について支援する」が得られた。

【考察】

小児慢性疾患患者の成人移行支援が推進される中、成人診療科に転科しない（できない）背景には、診療体制や患者の自立における課題と、疾患や障害の特徴により転科そのものが困難であるケースが混在していることが推察された。そのような中で小児科及び小児専門病院で診療を受ける成人患者と家族に対し、個別の発達段階に応じた看護を提供する中で自立を促す重要性が示された。次段階では、今回の結果をもとに、成人となった患者と家族にとってどのような診療体制が最善なのか考え、必要な看護ケアについて検討する。

1P138

医療的ケア児が小学校・中学校に就学する
前後の保護者の思いと看護師への期待

高野 政子、内藤 成美、草野 淳子、足立 綾

大分県立看護科学大学看護学部

【目的】

医療的ケアが必要な状態で学校生活する子ども（以下、医療的ケア児）が増加している。小・中学校に就学した医療的ケア児の保護者の就学に対する思いや、看護師に期待することを明らかにすることを目的とした。

【方法】

対象はH市で小・中学校に就学し、市の助成事業に参加している医療的ケア児の保護者とした。インタビューガイドを用いて半構造的面接を行った。逐語録のデータは、M-GTA法に基づき分析した。

【結果】

保護者は7名であった。分析の結果、5カテゴリー【 】と14サブカテゴリー《 》、27の概念が生成された。保護者の就学前の思いは、《出生時から就学の不安があった》ので、《就学先決定の情報収集は他人任せにできない》と考え、複数の学校見学を行っていた。その中には教育委員会から紹介された《学校に児を拒否された経験》をしていた。学校見学をした後には児とも話し合い《普通学校に就学させたい》という【小学校就学への思い】を述べた。就学先を決めた後は【就学前の集団生活の経験】が大事と考え、《幼稚園で集団生活になれさせたい》や、就学前に《先生に医療的ケア児を知ってほしい》と思い、小学校の先生とコミュニケーションをとっていた。児からは遊び時間のケアへの不満など《医療的ケアの課題》はあるが、《児が学校生活を楽しめていて安心》することができ【児の学校生活への適応に安心】できていた。《自分の自由時間が増えた》、《就労しやすくなった》など【就学後の保護者の生活変化】を認めた。【就学後の看護師への思いや期待】では、《看護師との連携やケアに満足》している反面、《看護師の手技への不安》も述べていた。看護師との関係づくりに時間がかかるので、看護師の頻繁な交代で児が嫌がることもあり、《児と看護師の関係が大事》と、保護者の気がかりを述べた。医療的ケアを行う《看護師への期待》として看護師の能力向上への期待があった。

【考察】

保護者は、児が地域の小・中学校に通学し、友だちと触れ合う経験を通して成長することを期待していると考えられる。また、保護者は看護師が行う医療的ケアに満足していたが、手技への不安や、看護師が頻繁に交代する場合は児との関係に気がかりを持っている保護者もいた。今後、医療的ケア児のケアと遊び時間確保の調整や、児に関わる看護師が望ましいケアを提供できるように研修体制を整備する課題があると考えられる。